シンポジウム12　日本におけるスポーツ医学教育の現状と課題

座長／聖マリアンナ医科大学スポーツ医学講座／藤谷博人
／札幌医科大学／山下敏彦

我が国ではこれまで，スポーツ医学教育の組織的かつ系統立ったシステムは確立されてこなかった．過去においては，スポーツ現場で活動する医師が個人の努力で必要な知識，技術を身に付けてきたのが実情である．

スポーツ医学は多くの専門分野が関わる学際的な学問である．そのため，医学全般の横断的な幅広い知識が必要であり，また実際のスポーツ現場では臨機応変な対応能力も要求されるため，いわゆる縦割りの医学専門教育とは異なり，スポーツ医学教育には様々な特殊性が含まれるものと考えられる．近年，スポーツの重要性が社会で認識される中，医学生あるいは若手医師のスポーツ医学への関心は高まっている．令和４年度改訂の「医学教育モデル・コア・カリキュラム」にスポーツ医学が導入されるなど，今後のスポーツ医学教育の重要性はさらに増すものと思われる．

本シンポジウムでは，５人の演者にご講演いただいた．

１「医学部におけるスポーツ医学教育の実際」

藤谷博人先生（聖マリアンナ医科大学スポーツ医学講座）

まず，2024 年に本学会の教育研修委員会が行った，全国医学部の医学教育に関するアンケート調査結果の一部が示された．全国の医学部でスポーツ医学教育の機会があったのは 90.2% であった．次に，医学部における実際のスポーツ医学教育の１例として，聖マリアンナ医科大学での 2002 年から 20 年以上に渡る取り組み（講義，実習）について紹介があった．

２「スポーツ医学の社会貢献～スポーツ医学教育の視点から～」

小川宗宏先生（奈良県立医科大学スポーツ医学講座）

スポーツ医学の社会貢献について講演された．その中で，学生のスポーツ現場での医療支援活動の実体験は，これからスポーツ医学を志す上での入口となり重要な取り組みであると述べられた．また，実際にアスリートの生活を支配している環境を理解することも大変有益であるとした．

３「スポーツ医学と他職種連携」

高澤祐治先生（順天堂大学スポーツ医学）

スポーツ医学と多職種連携の実際について示された．実際のスポーツ現場では，指導者，教育者，研究者，臨床家が連携することが重要であり，またプレホスピタルケアとして医師，看護師，救命士，アスレティックトレーナーなどの有資格者が連携して対応することも要求されるとのことであった．

４「日本におけるプライマリ・ケアスポーツ医学の役割・教育研修と今後の展望」

濱井彩乃先生（安房地域医療センター総合診療科）

運動器の診療やスポーツ医学も扱う総合診療医の立場からの講演であった．米国でのプライマリ・ケアスポーツ医学（PCSM）の研修システムの紹介があり，今後，日本で求められるスポーツ医学研修はどのようなものなのか，また総合診療医がスポーツ医学においてどのような役割を担っていけば良いのか，等について述べられた．

５「英国スポーツ医学（Sports and Exercise Medicine）教育の紹介とそこからの学び」

伊東知子先生（ニセコインターナショナルクリニック）

自ら，英国 University College London にて修士課程でスポーツ医学を学んだご経験を紹介いただいた．欧米では以前から，整形外科医だけでなくプライマリケア医も，スポーツ医としての役割を担ってきているが，これらのことから今後の日本でのスポーツ医学教育で活かせるポイントについて講演いただいた．

今回のシンポジウムでは，医学生，研修医，若手医師等を対象としたスポーツ医学教育の現状について，各シンポジストから具体的なお話をいただいた．大学（施設）によっては，すでにスポーツ医学教育が本

格的に展開されており，いずれも今後，様々な施設での取り組みの参考になる内容であった．また，総合診療医のスポーツ医学教育への参画は新たな重要事項であり，その実現性は高いものと思われた．一方，課題としては，スポーツ医学教育を実践する人材の育成，確保が全国的に急務であり，整形外科医にこだわらず，まずは各大学（施設）においてスポーツ医学教育を統括していくコアな人材を決めることが必要と考えられた．